

「六万四千漢字」への批評、あるいは問いかけ

「六万四千漢字」発表会に至るまでの関係者の御尽力に心から敬意を表したいと思います。私たちは、鈴木一誌への来賓挨拶の招請を、「六万四千漢字」プロジェクトが外部の批判に対しても開かれた場を用意したものと考え、この小冊子を制作いたしました。基本的な様々な疑問をとりあえず集めることによって、さらなる知的対話実現の契機となつたらと考えたからです。[3]コード批判に端を発し、「漢字が足りない」という素朴なユーザーとしての不満から、「文化問題」化した日本文藝家協会とマスコミによる「漢字が危ない」あるいは「漢字を救え！」キャンペーンは、私たちに、文字とは何か、漢字とは何か、文字コードとは何か、といった問題にとどまらず、では、言葉とは、文章とは何なのか、テキストを、作品を読みかき書くとはどういうことなのか、それが印刷され、あるいはオンラインの画面上に流通して読まれるということはどういうことなのか、といった幅広く本質的な、歴史的でありしかも現在と未来に関わる問題について、改めて考える契機ともなりました。

そこで今回の「六万四千漢字」発表会の鈴木一誌への来賓招請を機に、時間的には二か月足らずの短い時間でしたが、様々な立場で、文字、漢字、言葉、テキスト……といったものと深くかわりを持ち、日々、そうした文字、漢字、言葉、テキストを、それぞれの現場（組版、校正、編集、印刷、製版、文字デザイン、ブックデザイン、著作、研究）で読み書く職業と行為が続けている有志が集まり、研究活動を行いました。もとより、一つの統一的な見解を見い出すための集まりではありません。

この小冊子は、有志によって提出された「六万四千漢字」への、批評、批判、あるいは「素朴な疑問」の、ささやかな第一歩と言えるでしょう。なにしろ、私たちには、まだ東大明朝「六万四千漢字」の全貌を知るに至っていないからです。「東大明朝」「六万四千漢字」が、いわばデジタルの漢字の現状を救うことを期待された権力として、あるいは文化「文字の多様性の名のもとに」、しかも、この権力が行使されるためには、すべてを可視的にするが、その場合自らを不可視的にするという条件付きでその性質をそなえた、永続的で、尽きざる、遍在的な監視を、その権力は自分に付与しなければならぬ。その監視は、全社会を知覚の一分野に変形する、言わば顔を欠く視線のようではなければならない。」(M・フーコー『監獄の誕生』 田村俶訳)ものとして宣伝されている、と考えるのは、私たちだけでしょうか。

井上明、太田温乃、金井久美子、金井美恵子、日下潤一、隈元斗乙、小池和夫、

小宮山博史、柴田忠男、絳秀実、鈴木一誌、高野幸子、當山日出夫、豊島正之、直井靖、

府川充男、太等信行、前田晃一、前田年昭、向井裕一、日本語の文字と組版を考える会

【連絡先】〒一六二 〇八二二 東京都新宿区下宮比町二 一八 一 一〇二

日本語の文字と組版を考える会 HCC00672@nifty.ne.jp

〒一六二 〇八一五 東京都新宿区筑土八幡町六 九

鈴木一誌 prospero@po.iijnet.or.jp

「テキストは文字の集合」か？

『六万四千漢字』発表会来賓挨拶

(三〇分版)

鈴木一誌記

一九九八年六月一〇日現在

四月のある日、蓮實重彦さんから電話があり、六月十七日に東大明朝の発表会があるから、そこで発言しなさいとのことでした。それには伏線がありまして、東大明朝が、情報処理学者、デザインや組版、書体設計者や印刷史の専門家のあいだで話題になっていきますと、学長としてのではなく知人としての蓮實さんに、二か月ほど前に手紙で知らせておいたわけです。またそれは、日本文芸家協会の要望書やトロン・プロジェクトといっしょになった文化的に注目してもよいひとつの動きだ、ということもつけ加えておきました。少なくともJISコード批判という点では歩調をそろえています。新聞各紙が同じ論調で取りあげているのは、私には異様な風景と写りました。

文字コード問題に関して、私よりはもっとぶさわしい方がいると言いかけたら、蓮實さんから、いやデザイナーの立場でよいと一蹴されまして、こうしてここに立っているわけです。

蓮實さんの考えは、東大明朝「六万四千漢字」が悪いものであるはずはないけれども、内輪でほめあってもだめだから、外部での考えをきかせることができるならやってみなさいというものであると思います。

「六万四千漢字」の実物を全体として見た人は、いままで開発当事者をのぞいてひとりもいません。ですから、「六万四千漢字」についての批評は、断片的に発表されてきた資料に基づいています。『TRONWARE』50号(一九九八年四月、パーソナルメディア株式会社)がわれわれが入手できる最新の資料ですので、特に断らない限りこの号からの引用ということでお話しします。

この『TRONWARE』50号のなかで、「文章を書くためのコンピュータ」と

題されたシンポジウムが掲載されています。池澤夏樹さんが、インターネットで『山海経』^{せんかいきょう}のあそここのところ、なんだったつけ、ちょっと引きたい、だけど漢字が化けてしまう」という例を引いて、「慨嘆」^{がいたん}しています。慨嘆する気持ちはよくわかります。では、その慨嘆をどう解決するか。話はここからはじまります。

慨嘆の内容は人によってちがう、まずこれを確認しておきたい。『山海経』を、文学者が作品に引用したいのか、部下をもつ課長が明日の朝礼で枕に使用したいのか。読み上げるなら漢字が化けていても役に立つ。ただし読みがどのくらい同定されるのか。白文が読みたいのか、読み下しなのか。白文ならば、中国の字形でなければならず、明朝体がふさわしいかどうかも一概に決められない。その読み下し文がどの時代のだれの解釈なのかによっては、変体仮名が必要になってくる。刊本の異同を調べるのか、翻刻版の字形を調査したいのか、インターネットで『山海経』が参照しきれないという慨嘆は、多様性をおびている。テキストは、そこに実在しているのではなく、「幾通りにも読める可能性」^(家辺勝文)として開かれているのだと思います。

田村毅さんがお話しになった『ドゥルーズの思想』の訳者あとがきで、田村さんはこうお書きになっています。

「彼の思考が捉えどころがないように感じられるとすれば、それは裏庭に吹く風だからであり、どもっているからであり、多様だからだ。そこにドゥルーズという思想体系の核・中心・主体を求めようとするからでもあるだろう。彼の思考が風のように稀薄か、その多様性が拡散なのか、わが家の裏庭に群生する切つても切つても延びてくる強靱な篠^{しの}なのかは、読み手、書き手次第だろう。要するに、彼の語り口に再度耳を傾け、彼と対話するか否かである。」^{(大修館書}

店、一九八〇年)

語り手の語り口に耳を傾けるものにテキストは開かれるわけです。ユーザーの慨嘆はあるが、それは無数の内容としてある。ユーザーの慨嘆という無名のものがあるわけではないと思います。JISコードが何とかなれば解決する問題

ではない。端的に言えば、需要と供給の問題でしょう。実際、『新潮文庫の100冊』というCD-ROMでは外字は出ています。

それを解決するには、と考えたとたんに、その人はつくり手の立場に反転するのではないでしょうか。また、そうならないと解決策は生みだせないのではないか。ユーザーの立場のまま、慨嘆するだけで事態は解決できるのか、という問題が立ちます。何が表現できていないのか、何が理解からこぼれ落ちるのか、その吟味がなくて事態は解決できるのか。吉目木晴彦さんは講演でこう話されています。

「文字が出ないことに関していくら経緯や考え方を説明されても、結果として出ない文字は出ない、それが困るのです。」

吉目木さんは、ユーザーの立場に徹しようとしています。東大明朝もまた、ユーザーの立場のまま、事態を解決しようとしているようです。慨嘆の質を見極めないで、六万四千字という膨大な字形を集めて使用に供しようとしている。慨嘆の多様性を、六万四千字という膨大さのなかに取り込んでしまおうというわけですね。『TRONWARE』5号に収録されているシンポジウムで、中沢けいさんが

「大は小を兼ねるわけで、たくさんあるの中から選べばいいわけで、小さなものの中から選べというのは無理だ」と

と発言され、それを受けて坂村健さんが

「そう、一度一緒にしちゃったらもう元にもどりませんからね」

と、おっしゃっているのは、大によってさまざまな多様性を包もうという発想と理解します。では、大は小を兼ねるのか。東大明朝に関しては、この命題は成立しないと思います。なぜなら、東大明朝の六万四千字には、体系性がないからです。東大明朝六万四千字に体系性がないというのは、非難でもなんでもなく、東大明朝を特徴づけるものです。田村さんは、「東京新聞」で、

「日本語の新たな規格化ではなく、漢字のデータバンクをつくらうという考

えだ」(一九九八年一月二十八日)

と、発言されており、他の文章でもたびたび「漢字データ・ベースの構築」という言葉をお使いになっています（「漢字六万四千字のフォントセット公開に向けて」、パンフレット^ト。豊かな文字文化を創りあげるために^ト所収、以下「漢字六万四千字」と略称）。いつでも使用可能な状態で待機している漢字字形の貯金箱、といったイメージで私は東大明朝をとらえます。六万四千字もあれば、だいたいの要望には応えられるだろうという姿勢です。吉目木さんは講演のなかでこうおっしゃっています。

「私どもは、文字についての規範を求めているのではなく、あらゆる文が記述できる交換可能な符号化文字体系が欲しいということを言っているだけです」

規範はいらなと言っています。その六万四千字ですが、パンフレットのなかであるいはネット上でも、田村さんは、

「今日の日本社会で流通している漢字文字種はいくつあるのか、そして過去において、歴史的に使用されてきた漢字は幾種類あるのか。実はそれがよくわからないのだ」

と、お書きになっています（「漢字六万四千字」）。坂村さんは、

「あらゆる文字を区別してコード化する」

と、おっしゃっています（「世界通信基盤としての多国語処理」）。おふたかたの発言を串刺しにして理解するなら、六万四千字はたまたまの数字にしかすぎない。理念としては、今日以降毎年五千字とか一万字とか増やしていくべきものでしょう。

坂村さんの

「新たな俗字が生まれることも考えれば、コード化されていない文字の可能性は常にある」

という記述（『世界規模通信基盤としての他国語処理』）や、中沢さんの

「女が三人寄れば『姦^{かしま}』しいといった漢字の造形能力を、新しい漢字が生まれた場合にも残して欲しい。」

との指摘（東京新聞、一九九八年一月二八日）に沿えば、その文字セットはいつも未完成のままです。未完成であることに特徴がある。規準がないのだから、未完成と

いう概念もない。いったいなん文字必要かとの問いに対して、吉目木さんは講演で、

「この問題は多様性の問題そのものでもあるからです。したがってグレーゾーンはあるのですが、従来印刷の技術でできたぐらいのことは継承してほしいというのが、一つの線ではなかるうか、という気が、個人的にはしております」

と、話されていますが、日本近代印刷史研究家の府川充男さんの調査によれば、日本の印刷会社は一万字を越えない範囲でほとんどの仕事をしてきています（『ユリイカ』一九九八年五月号）。それでも確かに外字は出る可能性はある。出現しても一パーセントを下回る確率でしょうが、田村さんはネット上で、

「実はその残りの1%を網羅するためには漢字をどれほど用意すればよいのか、よくわからないのが現状だ」（東京大学総合研究博物館『活字から電子文字へ』）と記されています。未来の外字のために無数の漢字が用意されなければならないこととなります。未来のために現在が待機しているという構図があります。

東大明朝とはなんなのだろう。東大明朝のめざす核心はなにか。田村さんは、先ほどのネット上の文章を、こう結んでいます。

「漢字辞典（コード表）を作るのが当面の目標である」

JISコードは、字体を指し示しているわけですから、東大明朝は、字体が足りないという点に批評の立場を置いていることとなります。つまり、現在のJISコードの問題はコードの不足だと言っていることとなります。

概念としての具体的なかたちをもたない抽象的な文字を、一般的には「字体」とよんでいます。具体的な文字のかたちを、「書体ないしは書風をとおして実現された字形」と呼称してよいと思います。定義がゆれている側面もありますが、文字を考える際の補助線として字体と字形をこのように把握しておきます。

さて、規準がないものにコードが振れるのか、これが私の疑問です。どんどん総数が増えていく宿命にある文字セットに、どうしたらコードが振れるの

か。ここで東大明朝は明らかにぶれていると思います。

田村さん自身、「漢字辞典」と言っている。「漢字辞典」である以上、それは作品・著作であり、六万四千字であることに主義主張がなければならない。六万四千字が膨大な数であるとしても、有限であるからには、田村さんがおっしゃる「精選」(「漢字六万四千字」)「析出」(「東京大学総合研究博物館」^{web}「活字から電子文字へ」)の規準が求められる。小さな文字セットの集合は、大なる文字セットにはなりません。集合の規準と方針がちがうわけですから。六万四千字は、すべて一次資料から収集されなくてはならないはず。現時点では、六万四千字であることの規準も一文字ずつが同定されるための典拠も示されていません。先ほど引いた吉目木さんの発言、「文字についての規範を求めているのではなく、あらゆる文が記述できる交換可能な符号化文字体系が欲しい」についても、規範がなくて体系がありうるのかと問いたいです。

坂村さんのように、

「とにかく文字コードは全部に振らなければなりません」、「当然ユニフィケーションという考えはありません」

という立場もあります。ただこの坂村さんの発言を文字数についての発言として引用するのは少し酷なところもあって、これが語られている文脈では日本・中国・韓国の漢字をユニフィケーションしないと言っているのですが、坂村さん自身が「ユニフィケーションという文化破壊につながる問題」と著述されているのですから、あえてこう引用します。ユニフィケーション、つまりは包摂という概念を抜きにして「精選」「析出」ができるのか。東大明朝は、いわば田村発言と坂村発言のあいだでぶれている。ぶれてもかまわないのです。私は観客としてそのぶれを楽しんでいるのです。

東大明朝は、漢字数の多さは誇れるが、一つの体系性をもった大きな文字セットではないのではないのか。明朝体という書体によってデザインされた字形の貯金箱ではないか、これが私の疑いです。「多い」ということと、「大きい」ということはちがいます。

吉目木さんが、つい最近の『一冊の本』という（一九九八年五月号、朝日新聞社）小冊

子のなかでこうお書きになっています。

「電子活字コードの整備で大切なことは、コンピュータを使って文章を記録・流通させる際、文字処理の最小単位で、一つ一つの文字・文字表現がきちんと扱えるよう保証することだ。これを画面に表示したり印刷したりするのはまた別のことである」

「文字処理の最小単位」とはなんだろうかなどと疑問がわく文章ですが、今は置いておきます。もうひとつ、文章を紹介します。東京大学総合研究博物館が発行した『歴史の文字』（一九九六年）という本で、坂村さんが「デジタルの世界」というタイトルでお書きになっているなかでこういう一節があります。

「TRON コードでは、文章データとして蓄積するのは文章記述であり、文字表現は表示や印刷のときにデータベースの情報をもとに文章記述から変換されるとしている」としています。

このふたつの文章に共通しているのは、まず具体的なかたちをもたない抽象的な文字の集合としての文字がまずあり、あとで具体的な文字のかたちをあたえようという発想自体は、目新しくは見えようという発想です。

まず具体的なかたちをもたない抽象的な文字の集合としての文字がまずあり、あとで具体的な文字のかたちをあたえようという発想自体は、目新しくはないです。JIS コードやユニコードなどがそうです。ただ、東大明朝が特異なところは、具体的な「書体ないしは書風をとおして実現された字形」を留意しようということでしょう。吉目木さんは、講演でこうもおっしゃっています。

「基本的には、コンピュータの文字表記があらかじめ番号を振られた固定的な字形データを呼び出す方式をとっていることで発生している問題だと認識しています。コンピュータ間で文字を送受信する場合に字形データそのものではなく、この文字番号をやりとりすることによって情報の交換を行っていることから生じる問題だと考えております。」

引用した発言は、ふたつの文章から成り立っています。はじめの「基本的には、コンピューターの文字表記があらかじめ番号を振られた固定的な字形データと呼ばれる方式をとっていること」で発生している問題だと認識しています。「は、だからJISコードなど既存の文字コードにのりながら書体切り替えで対応しようとする」というように読めますが、二番目の「コンピューター間で文字を送受信する場合に字形データそのものではなく、この文字番号をやりとりすることによって情報の交換を行っていることから生じる問題だと考えております。」というくだりは、文字番号をやりとりしたらいかんということですから、コードであることそのものへの過激な批判と理解できます。手書きの文字しか認めないと読めます。ユーザーの立場に徹すればこうなる可能性があります。コードがだめという立場は、田村さんや坂村さんへの批判となっています。こうして、東大明朝は三者のあいだでぶれています。

そのぶれを眺めながら、それでも三者に共通した過ちがあると感じます。それは、「テキストは文字の集合」という考え方です。「テキストは文字の集合」というスローガンは、パンフレット「漢字六万四千字」の見出しからの引用ですが、お三方とも、文字を一文字ずつ集めていけばテキストになるとお考えになっっているようです。テキストという全体像めざして文字は集合するのです。それぞれのテキストにふさわしい文字集合があるはずです。紙をデジタルデータに置き換えるとなると、その段階で劣化します。目的意識を持って劣化させることがデータの書き換えなのではないでしょうか。

テキストは、それが紙であれモニターであれ、具体的な形状であるかたちやたたずまいをとめない読者の前に現われなければならないはず。吉木さんも、そこはよくわかりになっいて、

「1つの本がで上がるのは、印刷関係の方たちとの共同作業という部分があります。この共同作業の中で、ある時代の文字に関してお互いが共有している一種の美的な意識というようなものが反映されていくのだろうと、私は考えています」

と、講演されています。田村さんも、

「文字事象が作者個人だけの産物ではなく、その時代の読者と、読者との連携を保証するメディア（印刷、編集、出版、流通）の人々との共同作業の産物であることを見過ごし、名を残さなかった活字印刷工への敬意を忘れてはいないだろうか」

という見解（漢字六万四千字）を示されています。作品が公開されるならば、その書体、組み方が、どんなに不本意であれ、「原著者が意図したとおりの最良のテキスト」（田村「漢字六万四千字」）なのだと思います。その具体的な作品のかたちを不本意にしないために、原著者はがんばるべきです。テキストは具体的なかたちをともなつてしか読者の前に開かれません。だからこそ、読者は左ページのあの辺に感動した文章があったことを覚えているのではないでしょうか。ところが、田村さんも吉目木さんもわかっているながら、「テキストは文字の集合」というように転倒する。

字体がまずあつてそれに具体的な字形をあたえていくという発想は、無色透明な文字があるということを前提にしています。無色透明な文字の集合が無色透明なテキストだということになります。無色透明なテキストの集合が、無色透明なデジタル・アーカイブになるといっわけです。田村さんがお書きになるテキストの三段階理論、写本の電子コピーである「第一のテキスト」、電子テキスト化された校訂版「第二のテキスト」、わかりやすく加工された「第三のテキスト」は、精度の差はあるがおたがいが透明性を媒介にして階層化されている点で、やはり転倒しているように感じます。

しかし、われわれが作品に出会うとき、無色透明な文字に遭遇したのちに具体的な文字に行き当たっているわけではない。いきなり、「書体ないしは書風をとおして実現された字形」にぶちあたっているのです。いや、ひとつひとつの文字に出会っている暇もなく、一挙に作品に包まれている。文字がそこにあるという事態もない。一文字でも、文字がスクリーンやページにあるとき、何かの文脈をともなつている。無色透明なテキストが必要なときもある。たとえ

ば検索のときですね。でも、検索という文脈において必要なのだし、ある時代のある文書では、たとえば大きいという漢字と太いという漢字が区別されていなかったともききます。「大」と「太」を区別することすら障害になる場合もある（星野聰『続日本紀』の場合、『人文学と情報処理』第一〇号「文字コード 現状と未来」勉誠社、一九九二年）。

字体が文字の骨格ともいえる字形になってそれに肉付けがされて、はじめてわれわれの目に触れるという図式そのものがちがいます。字形は、書体ないしは書風をとおしてしか実現されないのです。それが、「書体ないしは書風をとおして実現された字形」といつている意味です。書風とは、書きぶりですね。文字は書かれ印字され印刷され描画されなければ存在しません。

「字形データそのもの」は、なんらかの書体でなければならぬ。ということは、「字形データそのもの」のやりとりは字形数かける明朝やゴシックや楷書やらの書体数になるから、とんでもない数になります。とんでもない漢字数を制御するために、坂村さんは「文字感」という概念を提唱されています。時代やパラダイムで文字セットを輪切りにしようという発想ですね。でも、「文字感」には、「書体感」が貼りついています。甲骨文字の時代に、明朝体による字形を持ちこむことはできない。結局は、文字は書体から離れられない。「天」という字も、横棒一本の上と下のどちらが長いかは書体によるのだそうです。そうした事情を無視して、もともと明朝体にはなかった字形を文字セットに逆輸入してさらにそれに文字コードをあたえるというようにどこまでも転倒していく。発想の転倒は、やはり文字に確実に反映されます。

字形には、さまざまな多様性があり、書風がありデザインがある。それらちがいを乗り越えて、私たちは他の字ではなく「その字」だと理解する。現実にいるいろいろな字があるからこそ、それらを重ね合わせ、結果的におぼろげに浮かんでくる字のイメージが字体とよばれるものでしょう。確かに、私たちは言葉を聞くと、頭に文字のイメージを思い浮かべる。だが、最初に文字のイメージがあつてそれを具体的な書体に当てはめたのでは決まてない。私たちの文字

のイメージ、イコール字体は、多くの具体的な文字の記憶の集合なのではないでしょうか。字体はあるのではなく、私たちひとりひとりの内部で生成する。だからこそ、文字がコミュニケーションのツールになりうるのではないですか。

東大明朝の発想は、私たちの文字の実体とまったく逆立ちをしています。テキストを文字という要素に分解して発想するようになる。ここに転倒がありません。ほんとうに「テキストは文字の集合」なのですか。われわれは文字をひとつずつ読んで、それを集合させてテキストを読んでいるのですか。

それは開発の手順であって、文字のありようとは関係ないという反論があるとしたら、その論法は正しいでしょうか。ここで冒頭の、ユーザーの立場のままで慨嘆するだけで事態は解決できるのか、という問題にもどりました。文字の実体とまったく逆立ちをしている以上、それはユーザーの立場に立っているとはいえないと思います。結局、ユーザーの立場という無名性の背後に開発者の論理があるのです。

多くの文字コードは、概念としての具体的なかたちをもたない抽象的な文字「字体」と具体的な文字のかたち「書体ないしは書風をとおして実現された字形」とはちがうという立場をとっています。抽象的な文字「字体」にしか責任を持たないということ。あとは、使用者の多様な解釈にまかせるといふことに他なりません。それがよいことか悪いことかは別にして、ある種の安全地帯に立っているわけです。ところが、東大明朝は、川上から川下までの文字の一貫した流れを制御しようとしています。川上が、字体で、字体が具現化するのが書体や字形だという発想です。東大明朝は、現実をコントロールしようとしている。具現するテキストが問題だから、文字を何とかしようというのが出発点です。「テキストは文字の集合」というスローガンはテキストという現実に影響を与えようという宣言です。「文化を救え」という文脈に立つなら、どのように救うのかという文化や歴史への解釈が要請され、すでに送り手の立場に立っています。

東大明朝は現実に影響を与えようとしている。ところが、規律や規則によつ

て、帝国主義的には現実に影響を与えたくないという気持ちがある。どこかで民主主義でありたいという気分がある。現実に影響を与えようとしているが、かたほうでは民主的でありたいというジレンマが、いろいろな局面に出てきている。複数の字形をなるべく多く集める。どの字形を選ぶかはユーザーに任せ、それが東大明朝の発想の原点だったと予想します。それが東大明朝の提案する民主主義です。すると、選択肢は多ければ多いほどよいわけだから「無限の」文字セットが理想となります。ところが、いざ実装となると、理念としての無限と現実としての有限かのあいだでゆれざるをえない。ユーザー主体なのか開発者主体なのか。この漢字の貯金箱は、体系性をもつのか、横並びのデータベースなのか。ユーザーの立場に立つなら、現実に直結したものにならざるをえないし、開発者の視点を入れるならばどこかで規範性をもたざるをえない。東大明朝、トロン・プロジェクト、日本文藝家協会の三者は、現実の前でほぼ分裂状態にあるとしか私には見えません。

東大明朝「六万四千漢字」は、ひとつの作品だということが忘れ去られてはいないでしょうか。「テキストは文字の集合」だとする発想が、文字セットにも現われている。透明な文字の集合である文字セットも透明だと言っているように見える。透明な文字セットなのだから、典拠や規範から逃れられると言いたいようなのです。

コードは、やさしく言えば、伝達におけるおたがいの約束事、ということだと思いますが、約束事は見えなくては困るのです。透明であることは、情報交換にとって決してよいことではないのです。一文字一文字は、どこかで彫られ書かれ使われた現実の痕跡でなければならない。実際の痕跡が記憶によって字になるのです。個別をとおして普遍性が獲得できるのです。透明であることはすなわち普遍的であるわけではありません。

透明な文字セットというイメージが、東大明朝のコード表と言われているものを横並びの番号付けなのか符号化文字集合なのかをわからなくさせています。

辞書・辞典はもちろん、あらゆる文字セットは、作品でありテキストです。テキストだから現実に影響を与えるのです。決して透明な文字の集合ではありません。少なくとも、透明であることを標榜する不透明で今ここにある漢字の集合なのです。規範を忌避したにせよ、規範を欠いた漢字の集合として現前しています。

東大明朝が、いま現実にこうしてあります。文字は存在したとたん、共通性をめざします。文字はコミュニケーションの意志だからです。ビジネスの側面から考えれば、デファクト・スタンダード、標準化をめざします。標準化をめざすのに、公的か民主的かの区別はないと思います。文化的な水準では、作品としてすぐれているかどうかです。

東大明朝は、コードとしての普遍性をめざしているのか、書体としての普遍性をめざしているのかは、今のところ分明ではありませんが、少なくともひとつの権力としてあります。それは、東大明朝に東京大学や学術振興会がタッチしているからではなくて、規範がない非公開なものとして見えていることによっています。規範の開示がないコードは権力です。だからこそ、文字の収集は権力の示威だったのです。体系性がないことは批評を封殺します。

漢字フォントは六万四千字はないと商品化できないという暗黙の圧力が発生します。さらに、東大明朝で出ているのですから出してください、という外字作成の要望が印刷現場に増えることは容易に想像できます。太い明朝やゴシックはどうなるのでしょうか。東大明朝のおかげで外字が増えるという笑えない事態が起きます。

東大明朝は、字形の規範としてひとり歩きしていきます。現実にいるいろいろな字があるからこそ、それらを重ね合わせ、結果的におぼろげに浮かんでくる字のイメージが字体とよばれます。ひとり歩きました字形の規範は、文字イメージが多くて文字のずれの集積だという私たちの現象を息苦しくします。出入り自由で規範の明示のない文字の收容は、一見、多様性の尊重に思えますが、現実の文字生成の多様性を殺すことになりかねません。民主的と思われる手続き

が、民主制を圧迫する皮肉があります。スクリーンフォントで六万四千字の差が表現できるのかという疑問もあります。目の悪い人にその差異をどのように表記しアクセスしてもらうのか。六万四千字の半分以上はある読めない漢字を、「ノーマライゼーション」「バリアフリー」といった観点からどう表示するのか。

JISコードが、コードであることによって批判されるなら、まったく別の場が必要だと思えます。吉目木さんの講演から引きます。

「標準化していくことが普遍性に到達する道ではないんです。普遍性は多様性の中からのみ見出されるものでしょう」

まさに多様性をどう捉えるかということです。多様性は具体的な個性のなかに潜んでいます。多さいコール多様性ではありません。ちがいを強調しすぎることは、同じものをちがうものにしてしまう危険性があります。多いことによる弊害も考えるべきです。六万四千字あるうとも、さまざまな漢字を同じかちがうかという弁別をしていることにかわりはありません。「一度一緒にしちゃったらもう元にもどりませんからね」という事態は、「六万四千字」でもというか、現状の「六万四千字」だからこそ起きるのです。未来にはできるからといって現状が肯定されるわけではないのです。あらゆる書物をオリジナルな字形によって収容する「デジタル・アーカイブ」は、たかだか六万四千字では絶対に無理です。おそらく「多さ」の問題ではないのでしょうか。

コードは、ノイズを排除しながら伝達という目的を遂げようとしています。ですが、ノイズを否定しているわけではないのです。コードがノイズという概念を生むのです。コードが、異体字や俗字、誤字を根のように生み出すのです。

最後に、『われわれはどんな時代を生きているか』(一九九八年、講談社現代新書)という蓮實さんと山内昌之さんの共著ですが、その最終章でおふたりが対談しています。蓮實さんの発言を引いて終わりにしたいと思います。

「人間にはどうしてもノイズを殺すことで情報化したいという欲望と、ノイズを殺さずにそのまま受け止め、なおそれと付き合いおうという欲望と、たぶん

「二つしかないと思うんですよ。僕としては、ノイズを殺さずに史料とどう付き合うかということが夢であり、なぜそれが夢かというと、そんなことは本当はできないかもしれないからです」

価値観がちがうコードががばらばらにあるのではなく、おだやかに共存することは技術的に可能なのではないのでしょうか。それは、シフトJISにのらないの話ではなく、文字集合の典拠と基準を公開することから対話は生まれます。まだ決して遅くありません。

(終わり)